

# 2002年夏 中国内モンゴル自治区 オルドス市とアラシャン盟調査報告

Report on the Oasis Project in Ordos and Alashaan, Inner Mongolia

Yang Haiying

楊 海 英

(静岡大学, jhyang@ipc.shizuoka.ac.jp)

## 目 次

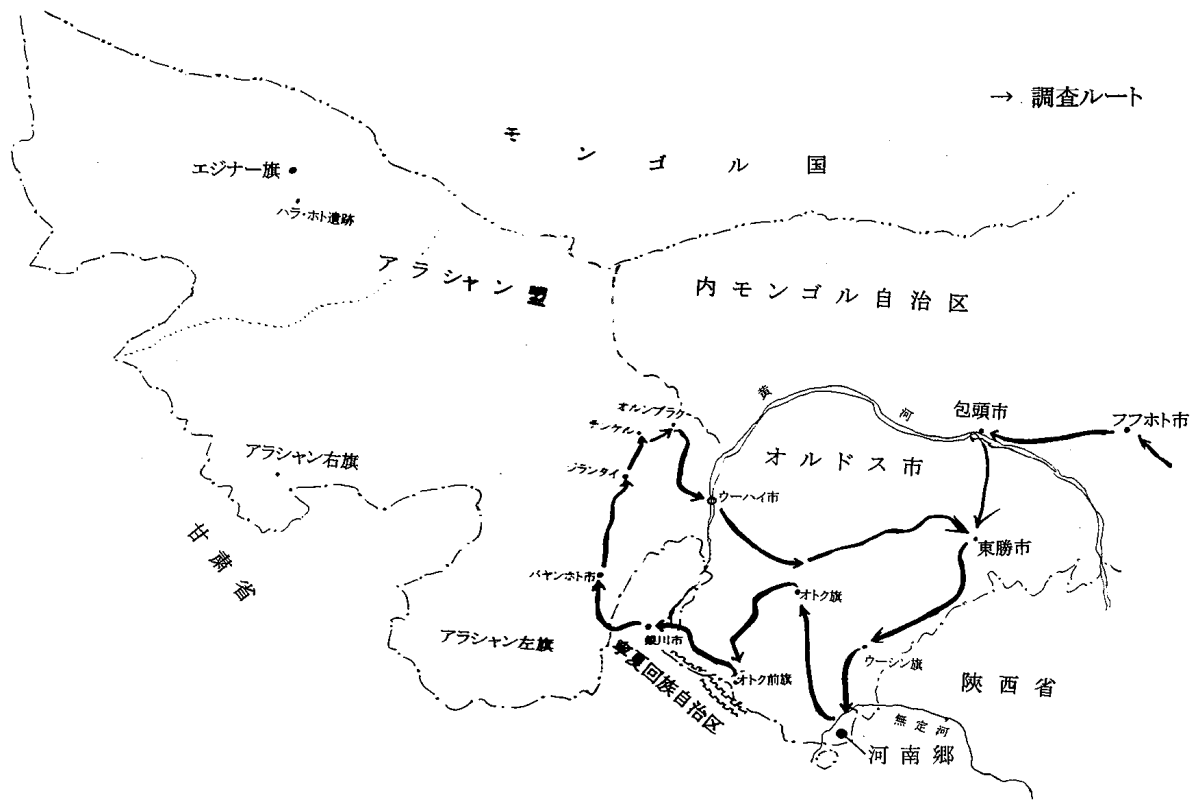
1. 話題は税金と商売
2. 生態旅遊という観光
3. 生態移民と冠した強制移住
4. 良い年の過ごし方
5. 小北京の断碑

2002年8月16日から9月14日にかけて、総合地球環境学研究所の「オアシスプロジェクト」(中尾正義教授リーダー)の一環として、内モンゴル自治区西部オルドス市(元伊克昭盟)とアラシャン(阿拉善)盟において、社会と政治状況に関する人類学的な実地調査を行った。調査者は北京から列車で内モンゴル自治区の首府フフホト市に入り、そこから自動車をチャーターしてオルドス市とアラシャン盟を走行した(調査ルート図参照)。オルドス市においては黄河の支流たる無定河流域における水利用、草原地帯における灌漑事情など、その実態と問題点を近現代史のなかでの大規模な人的移動との関連を中心に聞き取りを実施した。アラシャン盟では、主として近現代における民族自治運動の展開について資料収集を行った。

## 1: 話題は税金と商売

2002年は雨が多く、内モンゴル自治区西部は例年になく緑に覆われている。老人たちの話では1964年以来のことだそうだ。中には1950年の共産党政権成立以降、はじめて草が良く成長した年だと表現する人もいる。たしかに至るところで目にする草原の状態は良く、家畜もまるまると太っていた。

まずオルドス市ウーシン旗西部にある牧業地域で調査を始めた。西部大開発



2002年夏調査ルート図

の政策の一環として、経済的に後れた地域を優遇するため、家畜税を徴収しない見通しだと地元ソム (somu, 村) の責任者たちが説明していた。当然その情報は牧民たちにも伝わっており、多額の税金に対する不満は今年では聞かれなかった。ここで参考のために、2000年夏に、ウーシン旗のある牧民が政府に納付していた税金一覧表を提示しておく。それには牧業税、屠宰税 (屠殺税)、特産税、農業税、農業附加税、車船使用税、地方教育附加税など多種多様な税金が含まれていた。税金のほかに、地元のソム (村) 政府には管理費、教育附加費、優撫費、民工建勤費、民兵訓練費、計画生育 (出産) 費などを納入しなければならなかった (資料1参照)。家族2人からなる所帯で、ヒツジ161頭を飼育し、数畝の飼料用畑をつくっていた場合、1069.83元にのぼる税金と雑費を払わなければならなかった。牧民たちは「昔、中華民国の国民党は税金が多かったのに対し共産党は会議が多かった。いまや共産党は税金も会議もどっちも多い」、と表現していた。昨年までの税金政策と比べれば、諸税免除という政策は魅力的である。税金免除というニュースもおそらく牧民たちの心情を快くしたのであろう。そのため、草原も一段と美しく見えているかもしれない。

また、今年の羊毛の値段は1キロ当たり約14元 (10,000円≒670元 2002年

資料1 オルドス市モンゴル人牧民が支払う税金の項目(2000年)

农牧业统计申报及税费计算一览表

姓名	二、农牧业统计申报及税费计算标准										三、集体提留统筹项目标准					
	项	实有牲畜数	实际计税数	牧业税标准(头)	税额(元)	屠宰税标准(头)	税额(元)	特产税标准	税额(元)	营业税标准	税额(元)	水利费标准	税额(元)	地方教育附加(元)	统筹项目合计(元)	提留统筹项目及标准
合计	161	40	121	360元	360元	90元	540元	71.28元	8.55元	1069.83元	2	2406.00元	100.20元	100.20元	2406.00元	
牛				15											公积金	
马				10											公益金	0.1元
绵羊	100	40	120	360元	360元	60元									管理费	30元
山羊				3.5											教育附加	4.5元
猪	1		1		30元										医药费	5元
羊毛							10%	540元							民兵训练	0.6元
羊皮															计生费	5元
水浇地			15													
货车																
小车																
三轮																
二轮																

说明：1. 计税牲畜头数按实际存栏数计算，不扣出栏数。2. 屠宰税按实际屠宰头数计算。3. 特产税按实际产量计算。4. 营业税按实际营业额计算。5. 水利费按实际用水量计算。6. 地方教育附加按实际计税收入的一定比例计算。7. 统筹项目按国家规定标准计算。8. 合计栏为各项之和。

调查员签字：

制表人：王成字

8月現在)で、昨年までと違い等級別に売買されず、一律この値段であった。人々は羊毛値段の高騰をひそかに待っている。

オルドス地域に羊毛を求めてやってくるのは、内モンゴル自治区の西にある寧夏回族自治区の回族商人たちである。彼らは集団でトラックを運転して牧民の家をまわるが、牧民たちの家に入ろうとはしない。牧民たちから出されたお茶や食事も口にしない。直接井戸から水を汲み、屋外で石を使って簡易五徳を作り、自炊する。それはイスラム教徒である彼らが異教徒のモンゴル人の食べ物をタブー視しているからである。モンゴル人女性たちは回族のこのような行為を好意的に受け取る。中央アジアの遊牧民と同様に、モンゴルには接待文化があり、客が訪れたらお茶や食べ物を出してもてなすのが一般的である。もてなしは、女性たちにとって、決して楽な仕事ではない。接待をせずにはすむから女性たちは喜んでいるが、回族商人たちは商売上手で、羊毛を安く買い取ろうとするため、手ごわい相手でもある。

もうひとつの調査地は、農業地域のオルドス市ウーシン旗西南部の河南郷である。河南とは黄河の支流無定河の南に位置していることからの名称である。無定河の上流の名は紅柳河で、いくつかの細い流れと合流してから無定河となる。モンゴル人はこの河をシャルウスン・ゴールすなわち「黄色い水の河」と呼ぶ。ここでは灌漑事情について地元のモンゴル人に聞いた。それによると、1978、1979年頃に掘った機井(写真1)と呼ぶ電気ポンプ式井戸はほとんど使えなくなったという。当時は2~3メートル掘れば水が出ていたが、灌漑農地の拡大により、現在では地下水位が下がり汲み上げられなくなったためである。いまや地下へ100メートルほど掘る深水井戸を造らない限り、灌漑できなくなっているとの証言を得た。深水井戸は個人の力でできるものではない。井戸をほるため、農民たちは数戸で連携したり、政府に低利子投資を懇願したりしている。

農業は漢人がやるもので、農業をはじめたら、モンゴル人はモンゴルらしさを失う、という見方は大勢のモンゴル人たちのあいだに存在する(楊 1990:35-37)。河南郷にはモンゴル人農民が約2,000人ほど居住しているが、彼らの子弟が通うモンゴル語小学校(写真2)は数年前に廃校になった。モンゴル人の子供たちは仕方なく漢語学校に通うようになっていく。若いモンゴル人を中心に、母語であるモンゴル語を忘れていく人が増えている。母語を忘れ、その上農業に従事していることから、牧畜地域のモンゴル人たちから「漢化した人々」だと見られている。

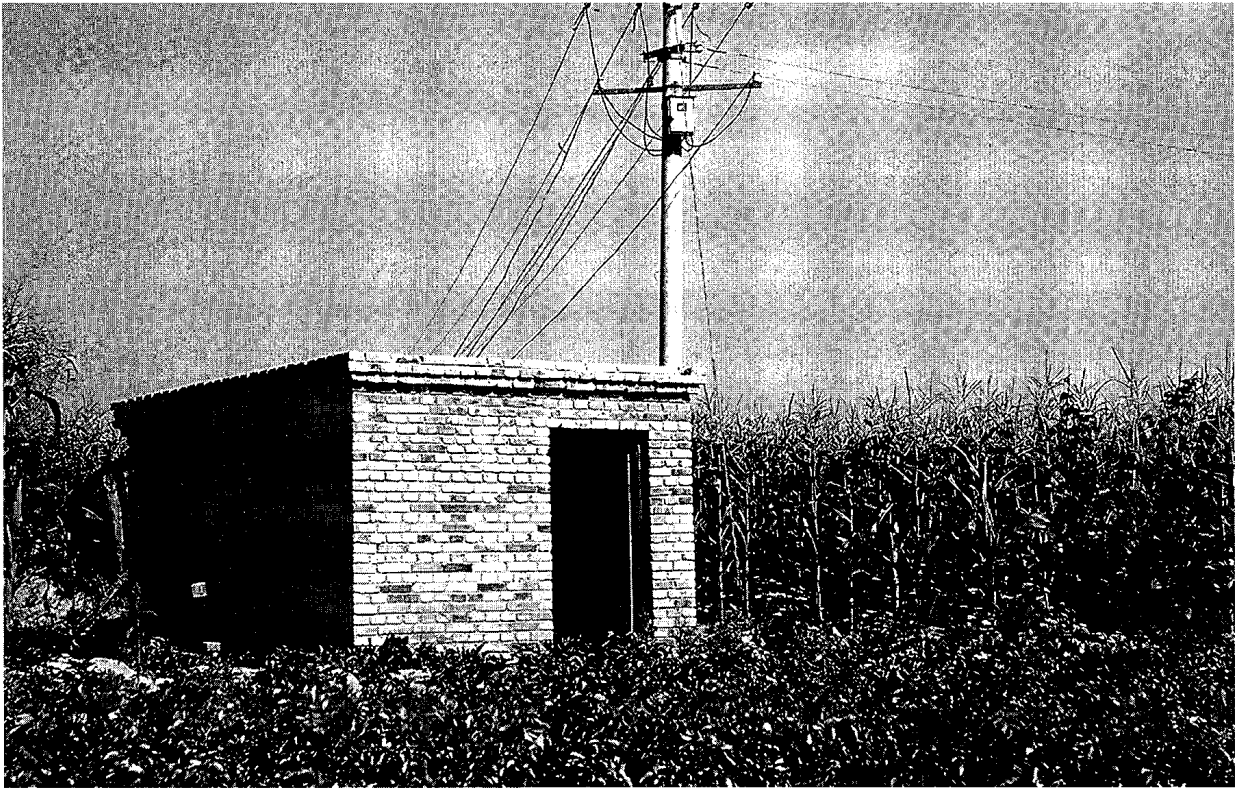


写真1 機井と呼ばれる電気ポンプ式井戸。  
家畜の飼料となるトウモロコシ畑に灌漑用水を提供する。



写真2 いまや廃校となったオルドス市ウーシン旗河南郷のモンゴル族小学校。  
1991年冬の国旗掲揚式。

## 2：生態旅遊という観光

環境問題への関心が高まるにつれて(写真3)、生態という言葉が中国でも最近よく使われるようになった。ただ、現代漢語の生態という言葉は、日本語のそれとは多少意味が異なり、人間の手が加えられていない手つかずの自然を指すニュアンスが強いようである。こうしたなか、「生態旅遊」という現象が内モンゴルとその周辺でめだってきている。

生態旅遊とは、名所や遺跡を訪れるのではなく、自然環境のすぐれた場所へ行くことを意味する。隣接の陝西省や寧夏回族自治区から、内モンゴル自治区西部へ生態旅遊に訪れる観光客が年々増加している。観光客らは生態保護の名目で囲まれた草原を目指す。このような草原を「生態開発区」と呼ぶ。

「生態開発区」とされる観光地(写真4,5,6)は、内モンゴル自治区西部に位置するオルドス市のオトク旗とオトク前旗に数カ所点在する。いわゆる生態開発区とよばれる小さな草原は、農耕化された地域に囲まれている。オルドスの草原が開墾され、大面積の農耕地が出現したのは、1950年以降の漢族農民の進出の結果である。漢人農民の手が届かなかった地域にモンゴル人が居住し、細々と牧畜を営んできた。漢人農民の居住地に比べれば、植生も破壊されず緑がたくさん残る。このようところが生態開発区となり、旅遊という観光資源にもなったのである。

モンゴル人牧民たちが生活の場としている草原は漢人の目に生態の良い場所として映ったため、開発の対象とされている。政府や大手企業は開発と保護を名目に、草原への進出を進めている。現在、草原を生態開発区として開発しているのはいずれも化学工業集団やカシミヤ工場集団の経営者たちである。

このような生態旅遊は、世界的に見られるエコ・ツーリズムの本質と通ずる一面がある。橋本は『観光人類学の戦略』のなかで、エコ・ツーリズムの登場についてつぎのように分析している。世界の先進国は自らの手で自然を破壊しながら、自然の大切さを説く。そして自分たちの生活スタイルをなんら変えずに、途上国の自然保護を語る。それには地球の環境危機の議論を先延ばししようというねらいすら見え隠れ、自然保護の名目で新しい開発を企む可能性もある。エコ・ツーリズムは自然保護の美辞を弄したビジネスであると指摘している(橋本 1999:266-289)。オルドス市の現状はまさにその中国版であるといっても過言ではなからう。

オトク旗とオトク前旗は中国の生態保護重点地域に指定されている。いわば、環境破壊のもっともすすんだ地域と認定されたのである。破壊された環境をも

